2024/7/21

ルカの福音書　講解メッセージ⑮

『ルカの福音書 6 章 17-36 節　人生の逆風は順風になる』

■本当のいやし

> 「それから、イエスは、彼らとともに山を下り、平らな所にお立ちになったが、多くの弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、さてはツロやシドンの海べから来た大ぜいの民衆がそこにいた。イエスの教えを聞き、また病気を直していただくために来た人々である。また、汚れた霊に悩まされていた人たちもいやされた。群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。」
>
> （ルカ 6:17-19）

イエス様の活動の中心は、病人をいやすことでした。汚れた霊とは、現在の心の病気にあたるものです。イエス様は、体の病気も心の病気もいやされました。「いやす」という言葉の原語は、ギリシャ語の「ソーゾー」で、これは「救う」という意味があります。では、私たちはいったい何の病気なのでしょうか。

人が病気になるのは、死が入り込んだことによると、聖書は教えています。死というのは有限性です。人はもともと永遠性で、朽ちる体ではなかったのですが、死が入り込んだことで朽ちる体になったため、体は病気を覚えるようになったのです。

また、有限性の体では永遠性の神を認識できません。人は本来神の愛を知っているのですが、それが認識できなくなったため、不安が生じます。その不安が、私たちの心を病気にしてしまうのです。

この世界では、病気を体の病気と心の病気の二つに分類しますが、神様の見立ては、人の見立てとは少し違います。神の目から見ると、私たちの病気は、神様と距離を取るという病気です。死が入り込んだとは、分離したということです。それは、物理的に分離したのではなく、神様が認識できなくなったということで、一つ屋根の下で暮らしているけれど、お互いに会話をしないという関係に似ています。神が呼び掛けても、人間の側が無視するという関係です。このように神様と距離を取ってしまうことが、神の側から見ると病気なのです。

神と距離を取るとは、神を信じないということです。ですから、聖書では神を信じないことを罪と言います。神の側からすると、これが問題なのです。

この病をいやすことができるのは、神だけです。神は、分離した私たちを引き寄せ

るため、その導入として、私たちの苦しみに対処してくださいます。苦しみの解決を求めてイエス様のもとに来るなら、神と距離を取るという本当の病気をいやされるのです。神との距離が縮まると、私たちの中にある不安が消え、平安が増すようになります。これを、「安息を手にする」と言います。

地上にいる限り、体の病気は完治しません。体は朽ちる方向にしか向かわないからです。そして、最後は土に帰ります。神が私たちにしたいことは、体や心の苦しみを体験したとしても、平安でいられるようにすることです。それは、神との距離が縮まることです。どんな苦しみや患難に出会っても、神との距離が縮まれば平安でいられます。

パウロは自分の体の病気がいやされるように祈りましたが、いやされませんでした。しかし、そのことでパウロは自分の弱さに気づき、その弱さの中に神の恵みが働くことを知り、平安を手にしました。見える状況は何も変わっていませんが、心が神に真剣に向くようになって、平安を手にしたのです。

心が神に真剣に向くとは、あなたが自分の弱さにどこまで気づくかということです。弱さに気づけば気づくほど十字架が見えるようになり、神様との距離が縮まっていきます。これが本当のいやしなのです。体や心のいやしは、そのための導入です。

■苦しみは幸い

「イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話しだされた。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。いま飢えている者は幸いです。やがてあなたがたは満ち足りるから。いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。人の子のため、人々があなたがたを憎むとき、あなたがたを除名し、辱め、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。その日には喜びなさい、おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。」（ルカ 6:20-23）

「しかし、あなたがた富む者は哀れです。慰めをすでに受けているから。いま食べ飽きているあなたがたは哀れです。やがて飢えるようになるから。いま笑うあなたがたは哀れです。やがて悲しみ泣くようになるから。みなの人がほめるとき、あなたがたは哀れです。彼らの父祖たちも、にせ預言者たちに同じことをしたのです。」（ルカ 6:24-26）

イエス様は、弟子たちに向かってこの話をしておられます。それは、弟子たちの信仰を訓練するためです。イエス様は、苦しみを覚えることは幸いであり、この世で喜びを覚えることは哀れだと言われました。この世の考え方とは 180 度違います。どういうことなのでしょうか。

人は苦しみを覚える時のことを「逆風」と呼び、喜びを覚える時のことを「順風」と呼びます。イエス様は、人生の逆風に遭っている人は幸いであり、順風の人は哀れだと言われました。それは、世の中で言われるような「ピンチはチャンス」というような意味ではありません。世の中では困難に出会うと、この逆風を乗り越える別の道を探そうとします。しかし、イエス様が言っているのは、そうではありません。

逆風か順風かを決めるのは心の向きです。あなたが向きを変えれば、逆風は順風になるのです。つまり、イエス様が言っておられるのは、逆風に遭ったならば、向きを変えよということです。それは、人生の目標を変えるということです。つまり、逆風か順風かを決めるのは、あなたの人生の目標なのです。

目標には、二種類しかありません。一つは、時間性における目標、もう一つは、永遠性における目標です。それは、この世における目標なのか、神が人に与えた目標なのかということです。時間性の目標とは、自分がやりたいことを人生の目標にすることです。永遠性における目標は、時間性の外にある目標です。

この世界の目標が行きつくところは決まっています。どんな目標も、自分が認められること、自分が褒められることにしか向かっていません。つまり、自分というものを目標にしているのです。いろいろな目標があるように見えますが、行きつくところは、愛されたいということです。自分を認めてほめてもらうために、周りの期待に応えることを目指して生きています。

それに対して、永遠性における目標とは、あなたが選んだ目標ではなく、神が人に与える目標のことです。神は人を造った時、どのように造ろうか、どのように人を生かすか、人とは何かということを規定しておられます。その規定に従って生きることを目標とするのです。これが、神を求めるということです。

■苦しみとは何か

苦しみとは、手にしたものを失うことです。この世界の目標は、それが何であれ、必ず失われます。時間性の最大の欠点は、最後は滅びるということです。これを有限性、死が入り込んだと言います。

たとえば、私たちは健康を維持しようと努力しても、100％維持することはできません。だんだん弱っていくのです。手にした健康を失うことは、苦しみとなります。あるいは、人に良く思われることを目指しても、あなたと反対する意見を持つ人、あ

なたのことを悪く言う人は必ず起きます。イエス様ですら、悪く言う人たちがいたのです。また、苦労して築いた地位は定年と共に失われ、お金も使えば失われ、家族や友達とも別れの時が来ます。このような「失う」という出来事に人は苦しみを覚えるのです。

ところが、この苦しみこそ幸いであると、イエス様は言われます。それは、あなたの目標を変えるチャンスだからです。失えば失うほど、今までの目標を見直すチャンスになります。もし、この世界で失うものがなく、順風満帆で何をやっても楽しいという人がいたら、その人はかわいそうです。人生の目標を変えるチャンスがないからです。

人は必ず苦しみに出会います。その時、自分の人生の目標は正しいかどうか考えてほしいのです。あなたが目標を変えたとたん、逆風は順風に変わります。苦しみは喜びに変わります。ピンチは小手先で苦しみを回避するチャンスではなく、心の向きを変えるチャンスです。そうすると、悪口を言われたり迫害されたりすることが、幸いだと思うようになるのです。

この世界は私たちから、ものを奪っていく世界です。時間の流れと共に失われるものは増え、天変地異によって突然失われるものもあります。しかし、失うことは幸いです。それは、握りしめていたこの世のものを手放し、神の御手につかまるチャンスだからです。

死の恐怖、不安の中で生きている私たちは、必死になってこの世界にしがみついて生きています。神ではなく、この世界にしがみついているのです。しかし、この世界で手にした安心が奪われていくと、それを握りしめていた手が空き、神が差し伸べている御手につかまることができるようになります。だから幸いなのです。

神と距離を取り、神に近づこうとはしないで、困った時だけ祈ればいいという生き方や、自分の立てた目標を助けてくれるのが神様だとばかりに、神を自分の召使いとする生き方をするクリスチャンもいます。それらの生き方は、神が目標ではありません。しかし、人生に行き詰って苦しみを覚えるということは、今まで安心をもたらしてくれていたものが安心をもたらさなくなるということですから、それを握りしめていた手が空いた状態になります。神が差し伸べておられる御手をつかむ手が空いたのです。苦しみの中で、自分の限界・弱さに気づいて、神の御手をつかみ、そこに働く神の恵みに気づいて、心を神に向けることができるようになるのです。これこそが、神が私たちに与えたい真のいやしなのです。

神は、あなたが神に近づくように、引っ張ろうとしておられます。あなたの人生の目標がこの地上だけのものなら、この世界で逆風にあった時、ただ苦しむだけで終わってしまいます。しかし、苦しみは、心を神に向けるチャンスです。大事なことは心

の向きを変え、人生の目標を時間的なものから永遠的なもの、つまり、神に変えることです。

■正しい目標

「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」（ルカ 6:27-31）

神が私たちに命じていることを一言で言うなら「愛」です。それは、敵をも愛し、憎む者にも善を行う愛です。神は愛ですから、神に目を向けるとは、愛に目を向けることです。

「自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。返してもらうつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。」（ルカ 6:32-34）

イエス様は、私が命じる愛は、罪人たちの愛とは異なると言っておられます。罪人の愛と義人の愛は、どのように違うのでしょうか。

罪人の愛とは、自分を愛する者を愛する愛です。結局は自分のため、つまり、見返りを求める愛です。人から感謝されたり、良く思われたりすることを求めているのです。しかし、義人の愛は見返りを求めません。

ところが、私たちは、誰もが罪人なので、イエス様が言われる義人の愛は実行不可能です。真似事はできても、完全にはできないのです。

「ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」（ルカ 6:35-36）

見返りを求めない者は、どのような報いを受けるのでしょうか。聖書に、「全き愛は恐れを締め出す（Ｉヨハネ 4：18）」とあります。全き愛とは、見返りを求めない愛のことです。それは恐れを締め出すのです。逆に言えば、恐れがあるのは、見返りを求めているからです。見返りを求めているから、自分が一生懸命やったことに対して、思ったような反応がないと、怒りや悲しみを覚えるのです。しかし、見返りを求めなければ、恐れがないので、感謝されてもされなくても問題になりません。

しかし、私たちは罪人ですから、どうしても見返りを求めてしまって、完全に見返りを求めないということは不可能です。神は完全な方ですから、神が求める愛は完全な愛です。ちょっとでも見返りを求める心が入り込んではならないのです。ですから、誰も完全に従うことはできません。実は、これが神の狙いなのです。

イエス様は弟子たちにこのように教えられましたが、弟子たちは見返りを求めないでイエス様に仕えることができたでしょうか。まったくできませんでした。

「さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。」（ルカ 9:46）

「また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。」（ルカ 22:24）

弟子たちの中で誰が偉いかと論争している場面が 2 度も記されています。このように、彼らは、偉くなりたい、イエス様に認められて出世したいという見返りを求めて頑張っていたのです。その結果、イエス様の評判が落ちて十字架につけられることになると、とたんにイエス様を裏切りました。人から悪く思われたくなかったからです。

そうやって弟子たちは小手先で苦難を乗り越えようとして生きてきました。これは、私たちの生き方と変わりません。私たちも常に見返りを求めて生きているので、逆風に遭うと何か小手先で乗り越えようとするものです。信仰ではなく、人々から良く思われる方向に舵を切ろうとするわけです。

イエス様が、この話をしたのは、私たちの中に限界があるということを知らせるた

めです。これが神の戒めの意図するところです。苦しみという逆風に遭った時、それを順風に変える方法は一つしかありません。心を神に向けることです。どうやって向ければいいのか、それは、神の戒めに従うことができなかったと気づくことです。やってもできないということに気づいたら、神の前にギブアップするしかないからです。「私にはできません。助けてください。」と神に憐れみを乞うこと、これこそが心を神に向けるということであり、神との距離が縮まったということです。

だから、神は私たちにできないことを命じるのです。神の戒めは、罪人にはできないことを要求しています。それは、神の命令に従えないという自分の限界、弱さ、罪に気づかせるためです。そうすると、私たちは、自分の不足を補ってくださる神の恵みが見えるようになります。こうして心から神により頼むことができるように変わるのです。

■解決方法

イエス様は、この問題に対する解決方法も教えておられます。これによって、イエス様を裏切った弟子たちは神に立ち返ることができたのです。

> 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:10-14）

パリサイ人は「正しい行いができた」と祈り、取税人は「正しい行いができなかった」と神に憐れみを求めました。神が義としたのは、パリサイ人ではなく、神にあわれみを求めた取罪人です。つまり、自分の弱さと罪に気づいて神に助けを求めることが、正しい答えなのです。それは、あなたと神との距離が縮まったということであり、それこそが神が私たちに望んでおられることです。

心が神に向くとは、見せかけで神の言われたことをやることではありません。本当に私の戒めを守ろうとするならできないはずだ、と神は見ておられます。弟子たちも

イエス様を裏切ることで、ようやくできない自分に気づいてそれを認めることができ、助けてくださいと祈ることができました。

あなたが自分の弱さ、限界に気づいて、神に憐れみを乞う時、あなたの心は神に向いています。そしてあなたの逆風は順風になるのです。そうして、今までの苦しみは喜びと希望に変わるのです。

私たちは、この世界で苦しみから逃れることはできません。つまり、何かを失わずに生きることはできません。でも、その苦しみに出会ったらならば、心の向きを変え、神の戒めを実行してごらん、と神は望んでおられます。そうすればうまくいく、ということではなく、さらに、できない自分にぶつかり、自分の弱さと限界に気づくなら、それこそがチャンスなのです。そこに神の恵みが働くからです。そうすると、私たちと神さまとの距離が縮まります。これが、神が私たちに望む本当のいやしなのです。それが私たちに本当の平安をもたらします。見える状況は何も変わらなくても平安を手にすることができるようになります。それこそが神が与えたいものなのです。

この世界の出来事は無限という分母からするとゼロになります。私たちは永遠のいのちを持ったときから、すべてがゼロになるのです。神の国という永遠の世界にはいる時、あなたの苦しみは拭い去られます。今まで生きてきた人生は一瞬になります。限りなくゼロです。だから、あなたの罪は赦されるのです。だから、罪に苦しむのはやめて、あなたの苦しみをゼロにし、永遠のいのちを与えた神に目を向けましょう。そのことに目を留める時、私たちは平安を得ます。そのチャンスを与えてくれるのが、この世の苦しみなのです。